

(書評) 友寄英隆『アベノミクスと日本資本主義——差し迫る「日本経済の崖」』

本書の主題は、安倍内閣の経済政策（いわゆるアベノミクス）の意味を、戦後の世界資本主義の歴史的「行き詰まり」現象と、日本資本主義が直面しているさまざまな課題に照らして分析し、その時代錯誤性と危険性を明らかにすることである。

本書の第Ⅰ部「アベノミクスと日本経済の二極化」では、安倍内閣が実施してきた主要な経済政策の結果を検討し、アベノミクスが日本経済のデフレ克服と活性化に顕著な成果を上げたとする政策推進者たちの評価とは逆に、一握りの多国籍企業とその他多くの企業、金融資産を持つ少数の富裕層と多くの持たざる人々の格差を拡大し、「失われた20年」に現れた日本資本主義の諸矛盾をさらに深刻化させ、短期的「景気回復」の陰で、日本経済を新たな景気後退、財政破綻、金融パニック、アジアでの孤立など四つの「崖」に導いていると結論付けている。

第Ⅱ部「世界と日本の資本主義——現状と変革の課題」では、第一に、2008～09年の金融危機・世界恐慌の分析を踏まえて、「新自由主義」型資本主義の矛盾が、「21世紀の先進国革命」の在り方が問われる新しい段階にまで深まっていると結論付け、第二に、このような世界資本主義の局面は、対米従属下の輸出主導型蓄積方式で発展し、1990年代以降は「新自由主義路線」を強めることで恐慌を繰り延べてきた日本資本主義に根本的な変革を迫っていると結論付け、日本社会の現局面を「歴史発展の本流と逆流が激しくせめぎあう時代」と特徴付けている。

以上の著者の認識から明らかになるのは、「失われた20年」を経て、今回の世界恐慌、さらに東日本大震災・原発過酷事故を経験した現在、国民経済と国民生活の観点から日本資本主義を長期的に改革する課題が、あれこれの制度改革に止まるものではなく、戦後日本社会の歴史を画する国民的事業にならざるを得ないということである。

翻って、アベノミクスの政策内容を見ると、ニューケインジアンインフレーターゲット論から借用したリフレ（緩やかなインフレ）政策、オールドケインジアン的な財政スピング政策、新自由主義的な規制緩和と大企業支援、労働者派遣法改悪、社会保障切り下げと消費税増税など、理論的な一貫性を欠いた「ごったまぜ」の観を呈している。アベノミクスの本丸である「成長戦略」を見ると、産業基盤強化、戦略市場創造プラン、国際市場戦略の三つのアクションプランを含み、雇用制度改革と「岩盤規制」解体を謳っているが、そこには世界経済と日本経済の現局面を客観的に分析し、日本の産業構造と国民生活の在り方を改革しようとする政府の責任感も、計画性も見られない。

アベノミクスに見られるこうした混乱とご都合主義の原因は、現政権と財界指導部が、前述のような世界経済の歴史的・構造的変化と、日本資本主義が直面する歴史的課題を全体的・客観的に認識しようとしないうことである。「異次元の金融緩和」がもたらした急激な円安にも関わらず、なぜ輸出は増加しないのか、長期低金利と急激な企業収益の改善にも関わらず、なぜ設備投資も雇用も増えないのか、第二次安倍内閣の発足からすでに1年半

が経過したが、なぜ「トリクルダウン」の効果を国民の多くが実感できないのか、「失われた20年」の間に産業構造と企業経営には幾多の「革新」が試みられたが、全体としての日本資本主義が依然として長期停滞と不透明感を払しょくできないのはなぜなのか、こうした問題の答えを見つけるためには、世界経済と日本経済の現況と1990年代以降に進められてきた新自由主義的経済政策との関係を掘り下げて検討し、対米従属と輸出主導の経済が行き詰まった真の原因を解明する必要がある。

これに対して、アベノミクスの「日本再興戦略」は、財界が求める目先の政策を整合性も計画性も欠いたまま手当たり次第に列挙し、今回の世界恐慌で破綻が証明された新自由主義路線をさらに乱暴なやり方で継続し、労働者と国民に容赦のない負担を押し付け、経済の二極化と国際的孤立を深める路線で、単に日本経済に展望を与えないだけでなく、それ自体が日本経済の矛盾と混迷をいっそう深刻化させ、危機の打開を妨げる要因に他ならないというのが、著者の診断である。

以上のように、アベノミクスに対する著者の診断は厳しいが、それは戦後日本資本主義の展開過程についての、国際的視野と歴史的視野を合わせた複眼的な分析から引き出されており、説得力がある。また、その論証は、丹念に整理されたデータと豊富な事実によって裏付けられており、分かりやすい。さらに、本書第7章に提示された、日本経済再生に必要な課題についても、基本的に賛成である。

評者は本書から多くのことを学んだが、一読者の立場から、あえて若干の希望を述べておきたい。

一つは、アベノミクスを国際的・歴史的視点から批判する本書の主題に照らすなら、世界経済と日本資本主義の現局面の特徴を考察した第Ⅱ部を前に置き、その結論に照らしてアベノミクス批判を展開する順序が、読者に分かりやすかったのではないかと思われる。もう一つは、著者は金融経済が肥大化した現代資本主義の分析において、「実体経済と金融経済の両面から分析する」必要性を指摘している。しかし、本書全体の論述において、実体経済の丹念な分析に比べて、金融経済の最新の事情に関する分析はやや不十分ではないかと思われる。

とは言え、アベノミクスの矛盾と混乱が、単に現政権の不見識だけではなく、日本を含む現代資本主義自体の歴史的行き詰まりを表しており、同時に、さらなる新自由主義路線でこの行き詰まりを強行突破しようとする支配層の無展望ぶりを表しているという著者の認識は貴重で、本書を多くの読者に推薦する所以である。